

先月の最初の日曜日は、三位一体主日で、祭色は白でした。大斎節は紫、イースター直前の日曜日から、赤や白の礼拝が続きましたが、先月の第2日曜日からは緑になりました。慎みの季節を表す紫や、お祝いの白と違い、緑は一般的な礼拝の色であって、希望、生命、自然を表していると言われていました。この季節が11月の終りまで、ずっと半年近く続くので、あまり緊張したような季節ではない、と思っていました。

ところが、私は先週の聖書の箇所から、たいへん衝撃を受けています。

それは、クリスチャンとか教会が、預言者の役割を負っているのだけれど、神様の御言葉を受け取っていながら、それを語るのではなく、人々の耳に心地良い言葉を語っていないか。もっと言えば、語る自分が賞賛されるために話しているような、そんな体質が当時のユダヤ教の指導者たちにはあり、それが現在の教会の宗教家と言われる、牧師たちにもあるような気がしたからです。

先週は、旧約にはエレミヤ書が選ばれ、神様が彼に与えられた御言葉の力に圧倒されて、それに抵抗できず、降参したエレミヤの気持ちが述べられている箇所でした。

国が滅ぼされそうな危機的状況の中で、エレミヤは無駄に抵抗するのではなく、東の国、バビロニアに降伏しなさい、と言います。このような発言は、国の防衛に当たっている指導者たちにとって、ちっともありがたくない言葉と言うより、迷惑な発言なので、エレミヤは迫害されます。

先週の説教を作る途中で、10数年前に手に入れていた、「エレミヤ」というビデオを少し見ました。

聖書に描かれた通りではありませんが、神様からみ言葉を受けた預言者の苦悩が良く描かれていると思いました。人々が神殿へ礼拝に行く途中の門の所に、エレミヤが檻に入れられて、丸一日さらし者にされる場面もあります。また、今日の福音書とも関係があるかと思いますが、エレミヤ書の16章には、神様がエレミヤに、妻をめとってはいけない、と命じる聖書の箇所があります。「預言者の孤独」ということがテーマの箇所なので、映画もそれが反映されているような、エレミヤの愛している女性との関係が悲劇に終わる所も表現されています。映画では直接、神様は彼に妻をめとってはいけない、とは言いませんが、聖書には16章の最初にあります。今日DVDを用意したので後で見てください。

ここまで申し上げたのは、今日の福音書にも、先週の、イエス様が弟子たちを伝道に遣わす時の注意が述べられているからです。弟子たちが伝道に出かける時、多くの迫害があることを恐れるな、というのが先週のテーマでしたが、今週は、イエス様がみ言葉を語る時、神様の言葉を受け入れる人と、受け入れない人とがいて、両者の間に、対立が起こることが述べられているからです。

「私は平和ではなく剣をもたらすために来た。」と言われるのは、そのような、神様のみ言葉を受け入れる人と受け入れない人の間に、どうしても対立は起きてしまうのだ、とイエス様は言われるのです。

そして、迫害や、対立が起こってしまう伝道に、これからでかける弟子たちのことを、イエス様は預言者にたとえておられるようです。

『40 あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである。41 預言者を預言者として受け入れる人は、預言者と同じ報いを受け、正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける。』

エレミヤ書を見ると、彼は陶器の壺を指導者たちの前で砕いたり、家畜に付けるくびきを自分の首に付けて人々の前に出ます。彼のこれらの行動は、自分の語る言葉を印象づけるために行っているのです。ここでは、神様のしもべであるバビロニアの王ネブカドネツアルに降伏しなさい、と勧めています。

私も、エレミヤに倣って、似たようなことをやってみます。

私が今、首からさげている緑のストールは、親しい友人が三十年ほど前、私の司祭接手のお祝いに生地を取り寄せて作ってくれたものです。ところが、緑を使うことが多いせいかもしれませんが、布が傷んできて、白い芯が見えるほどになってきました。だいたい、布というのは、織物工場で、縦糸と横糸が交互にぬわれて、できているんでしょうが、縦糸が弱ってしまったのでしょうか、横糸だけになり、芯が見えるようになってしまいました。縦も横もしっかりしていないと、布地はダメだということを教えてくれているように思いました。

現在私が普通使っている緑のストールは、新しいものをプレゼントされたので、この使い古したストールには出番がありません。

さてそれで、今日、取り上げたい聖書の箇所は、36節です。

マタイによる福音書10章36節。

「こうして、自分の家族の者が敵となる。」という言葉です。

それに続く37節の「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」

これらの言葉は、何を意味している、と皆さんはお考えでしょうか。私たちの前に、天秤ばかりが置かれていて、右にイエス様、左に父母や息子娘を置いて、どちらが大切か、比べさせているような場面を想像されるでしょうか。

私は、そうじゃないと思うのです。私たちが家族を愛する、という場合、その家族一人一人を、神様がイエス様を通して、愛してくださっている、ということ。同じ神様によって造られ、贖われた大切な存在だから大切にする、愛するということだ。そのことをわたしたちは、忘れないでいることが大切なのでしょう。

先ほど、私は20年間使っていたストールの縦糸が弱ってしまって、横糸だけなので、芯が見えるようになってしまった、と申しました。これは、私たちがいつも縦糸で象徴される、神様と私。あるいは、神様と私の家族たちひとりひとり。そのような関係をいつも意識しているか、それとも神様スキの横糸だけの関係になっているか、ということが問われているのだらうと思うのです。

わたしたちが、もし神様の愛を忘れて、横の人間関係にだけに基づいて、「愛だ、平和だ。」と唱えている時、それは、相手を尊重するのではなく、あくまで自分の利害関係だけの、自分が人々に賞賛されることだけ考えての、一時的、また表面的なものになってしまっているのではないか。神様ぬきの、自分にとって都合のいい、愛や平和の基準で行動しているのではないか、ということです。

私たちが、人の評判だけを気にして、語るべきことを語らない時、人々からの迫害はないでしょうが、何の役割も担っていない、居ても居なくてもいい存在になってしまっている、と思うのです。

マタイによる福音書の著者は、クリスチャンの役割を「地の塩」にたとえています。

『5:13 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。」

これは文脈から言って、その人は神様から見捨てられる、ということ意識しなければならないでしょう。

塩には、食べ物に味をつけること、そして、物を腐らさない、防腐剤の役割があります。人間の人生に意味を与え、また社会の腐敗を防ぐためにも、塩は貴重なのです。預言者の語る言葉が、人を勇気づけたり、社会の健全化のために役立つ、ということでしょう。

神様の、み言葉を語る時には、自分が迫害される可能性があることは、先週エレミヤ書や福音書から学んだことです。そして、今週は、神のみ言葉が語られる時、その相手に、対立や反目が起こることを、私たちは覚悟しておく必要があるということでしょう。

語ることによって、相手に分裂が起るのは仕方ないことです。人の理解度には個人差があり、また、同じ志の人々と思っけていても、そこに自分の多くの欲が絡んでいることもしばしばです。

それによる拒絶反応が起こることを心配し、それを避けるために、なまぬるい言葉を語ったのでは意味がありません。地の塩の話とよく似たたとえが、他の聖書の箇所に出てきます。

ヨハネの黙示録3章のラオディキアの教会のようなものでしょう。

『15 「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。16 熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」

教会やクリスチャンが、今言うべき言葉を、迫害があろうと、分裂を起こそうと、神様の命令だと思っけて語り続けることが、現在求められているように思います。